

## 令和4年度第1回まちづくりプロジェクトチーム議事要旨

日 時：令和4年8月24日（水）10:30～12:00

場 所：県庁本館4階地方創生局長室（一部オンライン）

### ○委員の主な発言

#### 【まちづくりに係る中間支援組織（コミュニティシンクタンク）の設置について】

- ・ 県内各市町村で特徴的なまちづくりを行っているプレーヤーがいるが、県全体で何かしようとする際には県民が100万人いても少ないのではないかなという規模。市町村毎で考えるボトムアップ型も必要だが、1つの市町村だけではまちづくりの人材やリソースも不足している。しかし社会的課題や地域課題は県内ではあまり変わらないので、各々で考えるのではなく、全県的な横串のコミュニティを作ることが大事という発想。
- ・ どこかの市町村がどうしたという話し合いより、富山県全体を通した魅力の作り方がそもそものまちづくりではないか。まちだけが発展するという発想ではない。
- ・ コミュニティシンクタンクは様々な意見を言い合い、インプット・フィルタリング・アウトプットまでができるチームであることが大前提。最近議論をして何か達成した感じになることが多い。具体性があり実現可能な話題を話し合うことが必要。
- ・ 富山県は近隣の市町村間の狭いシェアで競争している。成長戦略会議の委員も「富山県は全国的に見て特に市町村の仲が悪く手を携えて悪い方向に進んでいる」と仰っていて、これを打破するには横の繋がりを強くすることが必要。
- ・ まちづくりは住民自らが景観を良くしようと思うこと。京都府には景観アドバイザー制度があり、都市計画・建築・デザイン・色彩などの有識者等が登録されている。住民意識の向上を促す仕組みがあるからこそ綺麗な景観が生まれている。
- ・ まちづくりは担い手が重要。女性や若者が自然と携わる環境となれば良い。富山に既にあるものは変わらないから、そこに住む人の意識の変革にどのように取り組むのか。
- ・ 富山の魅力に気付くためのきっかけづくりや魅力の分かりやすさは重要。現状は情報が溢れているので、もう少し整理されれば若者が富山を知ろうと思うことができる。
- ・ 情報が溢れている時代なので目立つための戦略が必要だが、それに引っ張られるだけではいけない。地元の産業や観光の良さなど、地に足の着いた人々の住みやすさを可視化させる動きとつなげながら、分かり易さを出していけばよい。
- ・ まちづくりは県外から来た人たちに富山の良さを知ってもらい、また訪れたい・関わりたい、(その先に)移住したい、と思ってもらえるよう取り組むことであり、幸せ人口1,000万人というビジョンを可視化するためのパートである。
- ・ 富山県には各市町村に面白い人たちがいるので、その人々を連携させることが大事。それぞれの地域でやっていることを上手くナレッジしたり連帯することで、富山の共通項や共通の価値観が生まれていけば良い。

- ・ まちづくりを進める上で足りない部分として、社会と地域が共存できる領域への投資や活動（※）が重要であるのに足りていない。例えば、商売をするためにはその地域自体が活性化していなければならないが、そのための民間や公共の投資がしづらい状況である。  
※CSV=Creating Shared Value（共通価値の創造）
- ・ コミュニティシンクタンクでは、様々な専門組織や地域のプレーヤーが経験・知識・感性を持ち寄り本気の社会実験をして、そのフィードバックを商売に活かしたり地域の人が使えるナレッジにするような機能も必要。そのためには公共交通や金融機関など色々な分野に加わってもらう必要がある。
- ・ アメリカの中間支援組織は地元の電力・ガスなどのインフラ系や金融機関等が半分、残り半分を地域の自治体がお金を出して運営している。インフラや金融は企業や人口が増えるほど儲かるため先行投資をしてもらう形。半官半民でお金が回せて、スタッフは県・市職員や民間企業から集めたイノベティブなグループを組み行う体制が良い。
- ・ 渋谷未来デザインでは、何かに取り組む人に対してテーマに近いことをやる企業やプロジェクトを集めたり、渋谷のリソースを貸して関わる人を増やすという循環を作り出していた。動きがフレキシブルであり自分たちのテーマを勝手に膨らませてくれる人が増えるので良い枠組みだと感じた。
- ・ イベントをやっている人たちは孤独というかピンでやっていて大変なので、横の連帯を作りそれを県としてバックアップしてもらえるとリソースがない学生でも手を挙げる動きが生まれてくるのではないか。
- ・ まちづくりに携わる人が立ち寄れる場所があり、たまたまの出会いがあつて、そこからプロジェクトが自然発生的に出てくるみたいな場所が必要なのかなと思う。富山市のどこかにあればよいが、分室のように15市町村にあるのも楽しいと思う。
- ・ 産学官に加えて地元の金融機関が一緒になり取り組むことが必要。デット・エクイティ両方あると思うが、反動も含めて絡めていくことが大事だと思う。
- ・ 既存の価値感を持つ人たちが新しい価値感に変わるわけではない。新しい価値観を持つ人たちのボリュームが半数を超えたときに世界が変わると思う。しかしその人たちが少ないことが課題であり10倍、100倍と増えれば意識が変わる。
- ・ まちづくり組織を15市町村で強制的に作りなさいと言って作るのではなく、まず県として、横串を刺した組織を作り県がパイプ役となって、既に経験値がある先輩や組織につないであげ、結果として各地域でラボみたいなものを作ろうという動きが自発的に生まれれば良い。
- ・ まちづくりは全ての市町村で同じ色や同じペースでできるとは限らない。全く違うベースの人たちに臨機応変に対応できるシンクタンクの体制を作らなければならない。
- ・ 行政がいないと繋がらないという状況は良くない。もっとフレキシブルにスピード感を上げて、状況に応じてポンポン取り組める組織を官民一体となり作ればよい。

## 【その他】

- ・ 方向転換する速さこそが現代的だと思う。情報の流れも早く知識を一つ得たら翌週には違う知識が来る時代。そういう意味でも何か一つの思考にべったり囚われること自体がリスクなので、トライアンドエラーを繰り返すべき。
- ・ プランニングに時間をかけて実行計画を一つずつ考える動きは時代遅れ。ウェルビーイングの推進と幸せ人口 1,000 万人を掲げ方向性が定まっているのであれば、それに直結して失敗しても大して痛くないことはどんどんやるべき。
- ・ 学生が主体的に企画して行うイベントは規模が小さくてもったいないことが多い。そこを行政で支援してもらえれば規模感や学生の達成感も違ってくる。やりたいことを抱えている学生はたくさんいるので、うまく利用していければ良い。
  
- ・ P Tの会議はもう少し軽く楽しく盛り上がりながら進められないか。例えば学生に幹事をしてもらい「こんなことをやってみたくない？」とやらせてあげられる土壌を作り上げるなど。一方で、P Tとして絶対に欠かせないことは高いレベルで議論をしたり、プランニングと繋げたりするなど、両方の動きが必要。
- ・ (P Tの進め方について) 全員が一堂に会して議題に則って話すのはもう古い。検討を進めるチームと実行チームみたいに分けた方が良いかもしれない。
- ・ このP Tの形をまた3回やる必要はまずないと思う。中核となるコアな思いとか方向性が見えたということで、次の2回目は仲間をいかに増やすかという動きを取れば良い。
  
- ・ 行政の存在感が富山県に限らず低下している。これは新しい価値を生み出すリアリティが欠落していることであり、危機感を持った方が良い。まちづくりに関わっている人たちの所にヒントがあり、それをいかに拾い上げ実行するかということを考えた方が良い。
- ・ 際立ったことに取り組もうとすると、市町村では近すぎるが、県であればほどよい距離感だと感じる。これが県として取り組むことの大きいメリットの一つ。